

平成22年度 (社) 全日本鍼灸学会 第30回近畿支部学術
集会 講演要旨集

平成 22年 11月21日 (日)

明治東洋医学院専門学校

主催 (社) 全日本鍼灸学会近畿支部

特別講演

W・ミヒエル

近世ヨーロッパに伝えられた日本の鍼灸

近世東西医学交流の特徴

現代では東洋医学と西洋医学を対立するものとして扱う描写が多く見られるが、近世に遡ると、そのような認識はあまり確認できない。現存の史料を見る限り、相手側の医学・医術を拒否するというよりは、有用と思われるものを選択的に受け入れることが多かったようだ。情報交換が盛んになるにつれ、「逆輸入」のような現象も起こった。

日本の位置づけ

16世紀中頃から東アジアに進出し始めた西洋勢力に対し、中国と朝鮮が反発の姿勢を見せる一方で、日本は比較的寛容な反応を示した。1630年代に幕府が「海禁政策」を打ち出してからも西洋との緊密な交流は継続され、19世紀初頭まで、「東洋医学」に関する情報の大半は中国からではなく、長崎出島商館を通じてヨーロッパに伝えられた。その際、管鍼法、打鍼法など日本独特のものも、日中共同の医療法として受容された。

日葡交流時代と日蘭交流時代

日葡交流時代(1549-1639)に外科医出身のイエズス会士デ・アルメイダ(Luis de Almeida)が府内に設立した病院は日本における西洋医学のはじまりとして大いに讃えられている。約100名を収容できたこの病院は西洋の外科術と和漢の「内科」(本道)の共生の場として注目に値する。しかし、1587年から南蛮人の医療施設が破壊され、キリシタン弾圧により南蛮人との交流が次第に難しくなり、それぞれの医学に関する情報の交流も断片的なものになってしまった。東洋医学に対する目立った反応も見られなかった。

1609年から平戸で運営されたオランダ東インド会社の商館が1641年に長崎へ移設された際、会社は商館医のポストを常設し、継続的医学交流の基盤を築いた。採用試験

を受けた商館医の一部は、日本人に西洋医学を紹介する一方、日本における医学に関する情報や資料を収集し、その成果を書簡、論文、著書の形でヨーロッパに広めた。ときには、クライヤー（Andreas Cleyer）やティツィング（Isaac Titsingh）のような医学に関心のある商館長が西洋への情報伝達に大きく貢献した。

「鍼灸」の伝達と普及

鍼術と灸術の観察と受容は基本的に別々に進められた。「火のボタン」（botoës de fogo）として16世紀に紹介されたお灸は、1674年に刊行されたバタビアの牧師の著書によって足痛風の治療薬（「Moxa」）として注目されるようになり、日本でのさらなる研究の成果を踏まえつつ、オランダ、ドイツ、イギリス及びフランスの医学界において本格的に議論されるようになった。

灸術と同様に鍼術に関する最古の記述は日葡交流時代に遡る。しかし、経絡、気、虚実などの病理学的背景をある程度イメージすることなくしては治療の目的を想像することもできず、アジアでの観察者も西洋の読者達も、長い間鍼術（acupuncture）に対して懐疑的だった。

様々な解釈の試み

とりわけ打膿灸の観察により古代ギリシャやエジプトに類似の治療法があったという判断に至った医師たちは、患部（locus dolendi）と治療点（灸穴）の関連性について不思議に思いながらも、高価な輸入モグサの代替物を用い、すぐに独自の考えに基づく治療法を開発するようになった。医療術としてのお灸は比較的好意的に受容された。

その後ケンペル（Engelbert Kaempfer, 1651-1716）が胃腸に溜ったガスを抜くために鍼術を紹介してから、中国と日本の「acupuncture」に対する専門家の評価は厳しくなった。大方の研究者は経絡を血管と見なし、鍼術の応用範囲もあまり広がらなかった。18世紀後半頃、神経及び電気刺激に関する研究が盛んになると、神経系統との関連が研究課題として重要視されるようになった。

日本人・中国人医師の脈診に言及する報告は17世紀からヨーロッパに普及していたが、それを鍼灸と密接に結びつける研究者はいなかった。